

# iPadを用いたプレゼンテーションスキルの向上

副題

～「話す」「聞く」能力の伸長を目指して～

キーワード プレゼンテーション 指導の継続性

学校名 三宅村立三宅中学校／ICT教育推進委員会

所在地 〒100-1102  
東京都三宅島三宅村伊豆470ホームページ  
アドレス <http://miyake-chu.sakura.ne.jp/>

## 1. 研究の背景

本校は離島という環境にあり、人口約 2500 人の非常に小さなコミュニティに属している。本校の生徒数も例年 20～30 人前後と、一般的な公立学校 1 クラス弱程度の人数しかおらず、多くは保育園から高校まで、ほぼ一定の人間関係を継続する。その環境において「話す」「聞く」活動は、往々にして論理よりも情緒が重んじられる傾向にあり、「話す」「聞く」能力が、適切に育まれる環境とは言い難い。

三宅村では平成 26 年より、生徒一人一人に iPad を貸与している。恵まれた環境を生かし、iPad を用いたプレゼンテーション、発表等の機会を各教科意識的に設けているが「話す」「聞く」力が十分に涵養されたとはいえない現状である。約 4 年間にわたり指導方法について試行錯誤してきたが、手詰まり感が否めない。本助成を活用し、外部から講師を招聘してプレゼンテーションのいろはを学ぶことで、より論理的かつ興味を喚起する発表スタイルの定着を図るとともに、多くの生徒が抱いている「話す」活動に対する苦手意識の克服を目指す。

本校は離島という特性上、教員の異動サイクルが比較的早いという特徴がある。ICT 機器を活用する技能を各教員が学んだところで、それが継続的な教育活動に結びつきにくいという問題も内包している。本研究の成果を、ひとつの形として残すことで、その礎としたい。

## 2. 研究の目的

主題及び副題にあるように「プレゼンテーションを手段としたコミュニケーション能力の向上」を第一の目的としている。しかしながら、数値化（評価）が難しいテーマであるため、「1. 研究の背景」で述べたように『「話す」活動に対する抵抗感の軽減』を当面の目的として研究を行う。

政府は平成 28 年 7 月『教育の情報化加速化プラン～ICT を活用した「次世代の学校・地域」の創生～』を策定した。その中で具体的な取組施策として「児童生徒一人一台の教育用コンピュータ環境の実現」を第一に挙げている。上述した通り、三宅村では平成 26 年の段階で、その目標を自治体レベルで達成している。ハード面での課題を克服した上で、表出した課題について解決に取り組むという点で、他校のモデルとなりうるものとする。

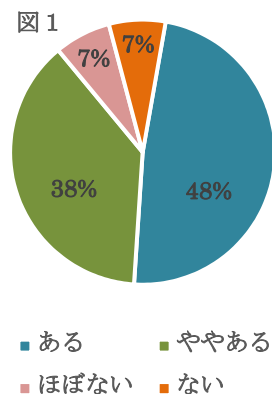
### 3. 研究の経過

#### (1) はじめに

生徒に一人一台情報端末を持たせる大前提として、学習規律の徹底がある。情報端末導入の第一歩であり、授業の秩序を保つ上で不可欠な要素である。研究を始める前に、この大前提について職員間で共通認識をもち、生徒に努力の継続を求めるところから研究が始まった。

#### (2) 生徒の実態の把握

生徒の実態を把握するため「話すことについて抵抗感があるか」という問いについてアンケートをとった。その結果8割以上の生徒が「話すことに対して抵抗感をもっている」ことが明らかになった。(図1) 理由としては「恥ずかしい」「自信がない」という感情的なものが目立った。より詳細な記述を求めたところ「話す内容がまとまらないから」「発表に慣れていないから」という回答が少数ながら寄せられた。以上から「話す内容が明確になれば、話すことに対する抵抗感は軽減される」と仮定を立てた。あらかじめ話す内容が決まっており、繰り返し練習できるプレゼンテーションは、課題解決の方法として相応しいことも併せて確認することができた。



#### (3) 研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
4	全教職員対象 ICT 研修会 (校内研修) 「Keynote ロイロノート、MDM 操作方法の習得」	
	生徒の実態把握	アンケート調査 (生徒)
5	国語科研究授業「竹取物語」	成果検討会 (参観者)
	数学科研究授業「多項式」	成果検討会 (参観者)
6	理科研究授業「生命の連続性」	成果検討会 (参観者)
7	総合的な学習の時間 「高知県大川村との Skype 交流」	観察記録・写真 (生徒)
8	全教職員対象 ICT 研究会 (校内研修) 「1 学期の反省と、2 学期以降の取り組み」	
9	社会化研究授業「コンビニエンスストア」	成果検討会 (参観者)
	英語科研究授業「夏休みの思い出」	成果検討会 (参観者)
10	数学科研究授業「関数 $y=ax^2$ 」	成果検討会 (参観者)
	Skype 対談 (講師⇔教師)	
	講師授業「発表の所作・態度」(講師⇔生徒)	アンケート調査 (生徒) 観察記録・写真 (生徒)
11	文化祭発表	成果検討会 (全教職員) 観察記録・写真 (生徒)
12	特別支援学級研究授業「書写・毛筆」	観察記録・写真 (生徒)

#### 4. 代表的な実践

本校では11月の文化祭で各学年発表の機会を設けている。例年1学年は総合学習で郷土三宅島について学び、その成果をiPadを用いてプレゼンテーション形式で発表している。今年度は「三宅島観光案内」というテーマで、観光地三宅島の魅力を発表することとした。発表に向けたプレゼンテーション指導の実践を以下に紹介する。

##### (1) 専門家による教師に対する指導

文化祭に向けた総合学習の時間に、講師を毎回招聘することは現実的ではなかったため、Skypeを用いて教師が講師から教える方法をとった。まず教師がプレゼンテーションについて学び、それを生徒に還元するという流れで効率的な指導に結びつけた。5回にわたる指導の中で、授業で上がった疑問点や問題点をひとつひとつ解決することで、プレゼンテーションの質を確実に向上させていった。なおプレゼンテーションの作成にはKeynoteを使用した。

##### (2) 授業実践

###### ・第1時…「対象の明確化と要素の抽出」

プレゼンテーションに限らず、他者に何かを伝えるとき、明確にすべきはその対象である。まず具体的な対象を考えさせ、その対象に訴求することができる要素（三宅島の魅力）を抽出する学習を行った。

###### ・第2時…「ピラミッド構造の考察」

要素を抽出した次の段階として、イメージマップの要領でピラミッド構造を作っていた。漠然としたイメージを整理するとともに、ピラミッドの基礎にあたる部分を、スライドで扱うこととした。

###### ・第3時…「スライドの作成」

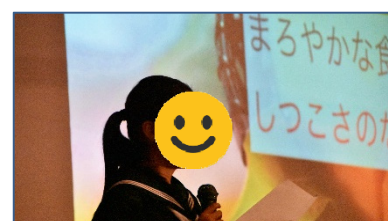
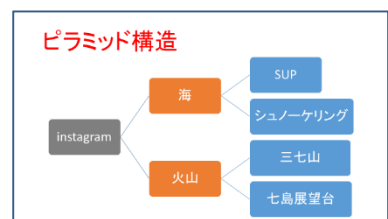
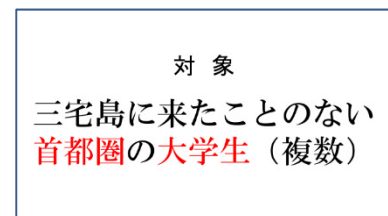
ピラミッドの基礎に当たる部分（第二時の図の青い部分）に対するスライドを作成した。ひとつのスライドにひとつ程度の情報・2色程度の色遣いというルールを設けた。その際、WWDC（米Apple社が毎年行う開発者向けイベント）のプレゼンテーションを適例として提示した。

###### ・第4時、第5時…「原稿の作成」

完成したスライドに対する原稿を作成した。スライドに託す情報は必要最低限に留め、言葉でそれを補うよう指導した。ここでもWWDCの映像を適例として提示した。

##### (3) 講師による授業

専門家を講師に迎え、生徒に対してプレゼンテーションの授業を行った。(1)で示した通り、複数回にわたる教師との意見交換の中で、スライドは完成していたため、プレゼン時の所作や態度について指導講評を受けた。



#### (4) 文化祭での発表

1 学年生徒 8 人に対し 100 余人の聴衆が聞き入る中、実際にプレゼンテーションを行った。生徒たちが想定した対象（三宅島に来たことがない家族・大学生…）ではない人々（家族・地域住人）に対する発表だったため、新鮮な発見や感動を与えるようなものにはならなかったが、講師の指導のもと練習を積み重ねたことで、堂々と、継続的な原稿指導が奏功して、論理的に、プレゼンテーションを行うことができた。

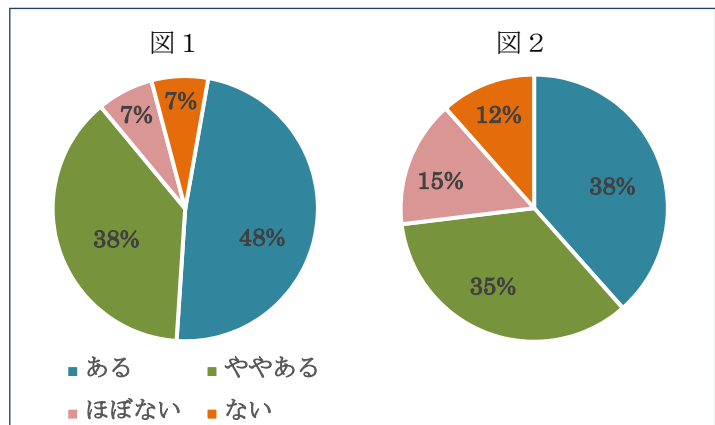
### 5. 研究の成果

本研究では、iPad を用いたプレゼンテーションスキルの向上を主題に据え、「話す」「聞く」能力の伸長、とりわけ「話す」活動に対する抵抗感の軽減を目指して、実践を行ってきた。それにより以下の成果を得ることができた。

#### (1) 「話す」活動に抵抗感をもつ生徒の減少

上述の通り、本校の地理的特徴に起因してか、本校の生徒は「話す」活動に抵抗感を示す生徒が著しく多い。論理的に文章を構築する力が未熟なことが、その原因のひとつであると考察した。そこで「**話す内容が明確になれば、話すことに対する抵抗感は軽減される**」と仮定を立てて研究に臨んできた。そこでプレゼンテーション作成を通して、話す内容を推敲する活動を取り入れた結果、次のような変化が見られた。「話すことについて抵抗感があるか」という問いに対する 4 月時点の回答が「図 1」、2 月現在の回答が「図 2」である。未だ抵抗感をもっている生徒の割合が高水準であることに相違はないが、「抵抗感がない・ほぼない」と回答した生徒の割合が、13%上昇した事実には、着目する価値がある。

その理由について尋ねたところ「授業で発表する機会が多かったから」「発表する内容を考えることが楽しいから」という回答がみられた。本研究を契機として、今年度本校では「話す」「聞く」活動、とりわけプレゼンテーション学習の機会を意識的に取り入れてきた。その結果が、生徒の「話す」活動に対する抵抗感の軽減に寄与したことは、大きな成果である。



#### (2) 「三宅中プレゼンテーションマニュアル」の作成

本研究における本校独自の取り組みとして、5 時間の授業でプレゼンテーションの完成を目指す「三宅中プレゼンテーションマニュアル」を作成した。上述した授業実践をもとにして、作成したマニュアルである。本校の課題として、異動サイクルの早さから、各自の実践が、継続的な教育活動に結びつきにくいという問題があった。今回このマニュアルを形として残すことによって、三宅島の特長である iPad を用いた「話す」活動の継続的な取り組みの礎を築くことができた。

スライドを作成するまで...

- 1 対象を明確にする
- 2 要素を抽出する
- 3 ピラミッド構成を作る

### 6. 今後の課題・展望

本研究において、プレゼンテーション学習が「話す」活動に対する「苦手意識」の改善に貢献することがわかったが、それが「話す力」の伸長に貢献するかどうかについては、明確にすることができなかった。学

習指導要領等をもとに「話す力」について今一度見直し、研究を続ける余地がある。また、今回は「話す」「聞く」能力の伸長を副題に掲げたが、「聞く」能力についてはその効果を測ることができなかった。聞き手の意識についても改めて調査し、本研究との関連も精査していく必要がある。

本校は iPad を導入してから 4 年が経過している。すでに教員使用機 (iPad mini) は公式サポート対象外となっており、生徒使用機にも不具合が頻発している。ハードを新調することは財政的にかなり厳しい状況であり、今後の見通しは不透明である。5 年程度で機器のサイクルが必要であることを、導入段階で計画に入れていくことも、持続的な ICT 機器の活用という観点では不可欠と考える。

## 7. おわりに

本研究では、プレゼンテーションツールとして iPad を活用した。授業や文化祭、各種学校行事においてプレゼンテーションを行う機会を多く設定し、生徒とともに、ICT 機器に苦手意識をもっていた教員も実践を通して理解を深めていくことができた。生徒教師双方の前向きな取り組みがあったからこそ、「話す活動の苦手意識の軽減」という成果をあげることができたのだと考える。

本研究を通して、教師を対象とした ICT 研修会等も行われた。これは次年度以降も継続していく予定である。「三宅中プレゼンテーションマニュアル」とともに、次年度以降につながる、継続的な取り組みの素地を築くことができた。

末筆ながら、助成校に御選出いただき、様々な面でサポートしてくださったパナソニック教育財団様、講演や授業支援等でご協力いただいた株式会社ビジネス IT アカデミー代表田中様に、心から感謝申し上げたい。